



中村 哲・尚子

ロンドン

Abbey Missionary School

で研修中

パキスタン、ペシャワール

ミッション・ホスピタル派遣

みなさんお元気ですか？ 毎月JOCSから送られてくるこの「祈りの手紙」も、自分の任期が近づくにつれてますます身近に感じ、何度も読みかえします。各ワーカーの方々の御苦勞も他人ごとではなくなりつつあるせい、自分のことのように喜んだり同情したりします。

さて私たちは、昨年12月にロンドンでの英語研修を終え、リヴァプールに移って来ました。こちらに来て1ヶ月が経ち、熱帯医学校も始まって2週間になります。リヴァプールはロンドンに比べると殺風景なところですが、人情はずっと良いです。英国で最悪の失業率を誇る所で人々は生活するのにけんめいです。ロンドンのように人を威嚇するような、みせびらかすような建物や博物館もなく、街をゆきかう「生活者」の群は、かえって親しみをおこさせます。私たちにはこういう所の方が性にあっていのでしょうか。日本人は殆ど居ませんが、現地の救世軍を始めCMF (Christian Medical Fellowship) の方々が、何かと親切にして下さるので困ることはありません。

現在は家内が一人で家のきりもりをしています。やればなんとかなるもので、家事の合い間をぬってこちらの語学校(無料。生徒2人。英国は不思議な国です。)にも通っています。先日などは、吹きすさぶ寒風について息子を背にして娘の手をひいてでかけたのはよかったです。道をまちがえてしまいました。途方にくれて、ある婦人に道をたずねたところ、ていねいに教えてくれた上、「かわいそうに、子供に甘いものでも。」と10ペンス硬貨を娘の手にしっかりとにぎらせて去ってゆかれたそうです。難民とまちがえられたらしいのです。「みじめな感じがしたけど、親切が嬉しかった。」とは家内の感想です。

という具合で、寒さに負けずたくましく生活しております。(なお、その10ペンスはチョコレートに変化して家につきました。)

私は家のことは一切家内にまかせて、目下猛勉強中です。(正確に言うと、「そのつもり」です。)ああ早くこの時を去らせ給え、というのが正直な感想です。

しかし学校に来てつくづく思うのは、「熱帯医学」といっても大半は過去、ほんのわれわれの子供の頃まで日本に普通にあったものなのです。改めて考えさせられました。

ともあれ、みなさんの祈りに支えられて、家族一同元気です。まことに、私たちの働きが、数えきれないくらいの多くの人々の支えで初めて出来るのだというのがこちらに来てからの実感です。それらを無駄にせぬよう頑張ります。ではまた。